

時間の社会学を振り返る

慶應義塾大学 鳥越信吾

1 目的

本報告の目的は、時間の社会学の学説史を検討・整理し、時間の社会学がこれまで何をどう論じてきたのかの一端を明らかにすることにある。

2 内容

時間の社会学 (Zeitsoziologie) の嚆矢とされるのは E・デュルケームの『宗教生活の基本形態』である (Bergmann 1983)。周知の通り社会学の対象を「社会的事実」に求めたデュルケームからすれば、時間もまた社会的事実としての性格を有する。すなわち時間とは、一方で自然科学の考えていたような絶対的な時間ではなく、社会集団毎に異なった相対的な時間であり (cf. Durkheim 1912=2014: 31)、また他方で、時間とは主観に先験的に属する形式ではなく、「非人格的な外枠」、すなわち「私の時間ではなく、同一の文明に属する万人によって客観的に思考されるような時間」である (Durkheim 1912=2014: 30-1)。こうした観点から出発した時間の社会学は、デュルケーム以後、様々な仕方で展開されていくことになる。たとえば、M・モースや M・アルヴァックス (Gad?a and Lallement 2001)、またア P・ソローキンと R・K・マートンや W・ムーアらが、時間についての研究を行っている (Sorokin and Merton 1937; Moore 1963= 1974)。

もちろん、すでに時間の社会学の学説史をまとめる研究が出されてはいる。代表的なものとしては、それぞれの社会理論家が時間をどのように捉え、また自身の理論の中に位置づけているかという点に焦点を当てた (Adam 1990; ?ubrt 2001) や、「時間計算」や「余暇と労働時間」などのトピックごとに諸研究をまとめた研究 (Bergmann 1983; Pronovost 1989) が挙げられる。しかしながら、これらの仕事が世に出されてからすでに年月が経っており、そのあいだに——社会 (科) 学の時間論の専門誌である *Time and Society* が 1992 年に創刊されたこともあいまって——時間の社会学研究はかなりの程度、展開されていると考えられる。そこで本報告では、これらの先行研究をふまえて、近年の時間の社会学研究を整理することで、時間の社会学の議論の布置連関を描き出すことを目指す。

Adam, B. 1990, *Time and Social Theory*, polity. = 1997, 伊藤誓他訳『時間と社会理論』法政大学出版局。

Bergmann, W. 1983, "Das Problem der Zeit in der Soziologie: Ein Literat?r?berblick zum Stand der 'zeitsoziologischen' Theorie und Forschung" *Versuch Einer Ontologie Der Pers?nlichkeit*. (35) 3: 462-504.

Durkheim, E. 1912, *Les formes ?l?mentaires de la vie religieuse: Le syst?me tot?mique en Australie*, Alcan. =2014, 山崎亮訳『宗教生活の基本形態』岩波書店。

Gad?a, C. and Lallement, M. 2001, "French Sociology and Time: Origin, Development, and Current Research", *Kronoscope*, 1 (1-2): 101-128.

Moore, W. 1963, *Man, Time, and Society*, John Willey & Sons. =1974, 丹下隆一訳『時間の社会学』新泉社。

Pronovost, G. 1989, *The Sociology of Time*, SAGE.

Sorokin, P. and Merton, R. K. 1937, "Social Time: A Methodological and Functional Analysis" *American Journal of Sociology*, 42(5): 615-629.

?ubrt, J. 2001, "The Problem of Time from the Perspective of the Social Sciences" *Czech Sociological Review*, 9(2): 211?224.